

静岡県広野北遺跡における旧石器時代文化層の再検討

富樫孝志

要旨

静岡県広野北遺跡は、磐田原台地上にある古墳時代～旧石器時代の遺跡である。この遺跡では、ナイフ形石器文化期の文化層「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」が層位的に分離されて報告されており、当地における編年の指標になっている。しかし、磐田原台地は層位的条件が良くないため、層位的に文化層を設定することは不可能と言うのが現在の共通認識になっている。そこで、「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」が報告通り分離できるか検討した。報告書では、両文化層は間層をはさんで分離できるうえに、礫群の出土レベルが上下に分かれるため、文化層は明確に分かれると書かれている。しかし、遺物の出土状況を復元したところ、ほとんどのブロック、礫群、配石は、間層を介在せずに様々なレベルで出土していることが判明した。遺物が旧石器時代包含層の様々なレベルで出土することは、磐田原台地では通常のこと、広野北遺跡もその一例に過ぎないと言うのが実態である。したがって、報告書に明記された「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」の分離は白紙に戻し、全面的に再検討する必要がある。その際、層位的に文化層を認定できない当地では、文化層に代わる概念として提唱された「エリア」を設定することが有効である。

1. 磐田原台地の概要

磐田原台地は静岡県磐田市と袋井市にまたがる台地で、10万年～8万年前に土地が隆起して形成されたと言われている。平面形は北から南に向かって開く二等辺三角形に似た形で、南北11km、東西は最も広い所で5km程の大きさである(図1)。北は標高130m付近から始まり、南に向かって緩やかに標高が低くなり、標高2.5m付近で沖積平野の下に潜っていく。

台地の西側には天竜川が流れ、台地の西端は、天竜川の浸食によって高さ数十mの崖となっている。旧石器時代の遺跡は、台地の西側に集中しており、最新のデータでは80箇所以上が登録されている(日本旧石器学会2010)。

磐田原台地の土層は、磐田原礫層と呼ばれる基盤礫層の上に、地元で「遠州の空っ風」と呼ばれる冬の季節風によって、天竜川方面から吹き上げられた土砂が堆積した風成堆積物からなっている(武藤1987)。旧石器時代の包含層は厚さ1m弱で、一般には出土レベルを基にした時期区分や文化層分離はできないと言うのが現在での共通認識である。この認識は、匂坂中遺跡(鈴木1994、鈴木・竹内1996)、山田原Ⅱ遺跡(松井1994)、高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡(富樫1998)、長者屋敷北遺跡(佐口・大村2009)高見丘

I・Ⅱ遺跡(竹内・渡邊2013)と言った、調査面積が1万㎡を超える大規模調査を重ね、文化層分離の試行錯誤を繰り返した結果である。

磐田原台地における旧石器時代遺跡の実態を匂坂中遺跡¹⁾を例にとって確認する。匂坂中遺跡は8万㎡に渡って調査され、丘陵と谷をすべて調査し、台地上に石器ブロックや礫群が、粗密を持ちながらも連続と残されている実態が明らかにされた(図2)。

匂坂中遺跡の標準土層は図2に示した柱状図のとおりで、旧石器時代の遺物はⅢ層～Ⅳa層で出土している。Ⅳb層は、当地で「暗色帯」と呼ばれている土層で、暗褐色を呈することが多い。遺跡によってはこの層からも旧石器時代の遺物が出土するが、匂坂中遺跡では僅少である。したがって、Ⅲ層～Ⅳa層の厚さ40cm程度の中に多量の石器、礫群、配石が含まれていたことになる。

図示したブロックは、縦長剥片を主体とするブロックと瀬戸内系石器群を含むブロック、角錐状石器を含むブロックで、二時期もしくは三時期に分かれると考えるのが通常だが、匂坂中遺跡では、これらのブロックがレベル差を持ちながらもⅢ層～Ⅳa層内で連続して出土した。

調査当時は、ブロックや礫群、配石がレベル差をもって出土したため、層位的に時期区分できる期待もあ

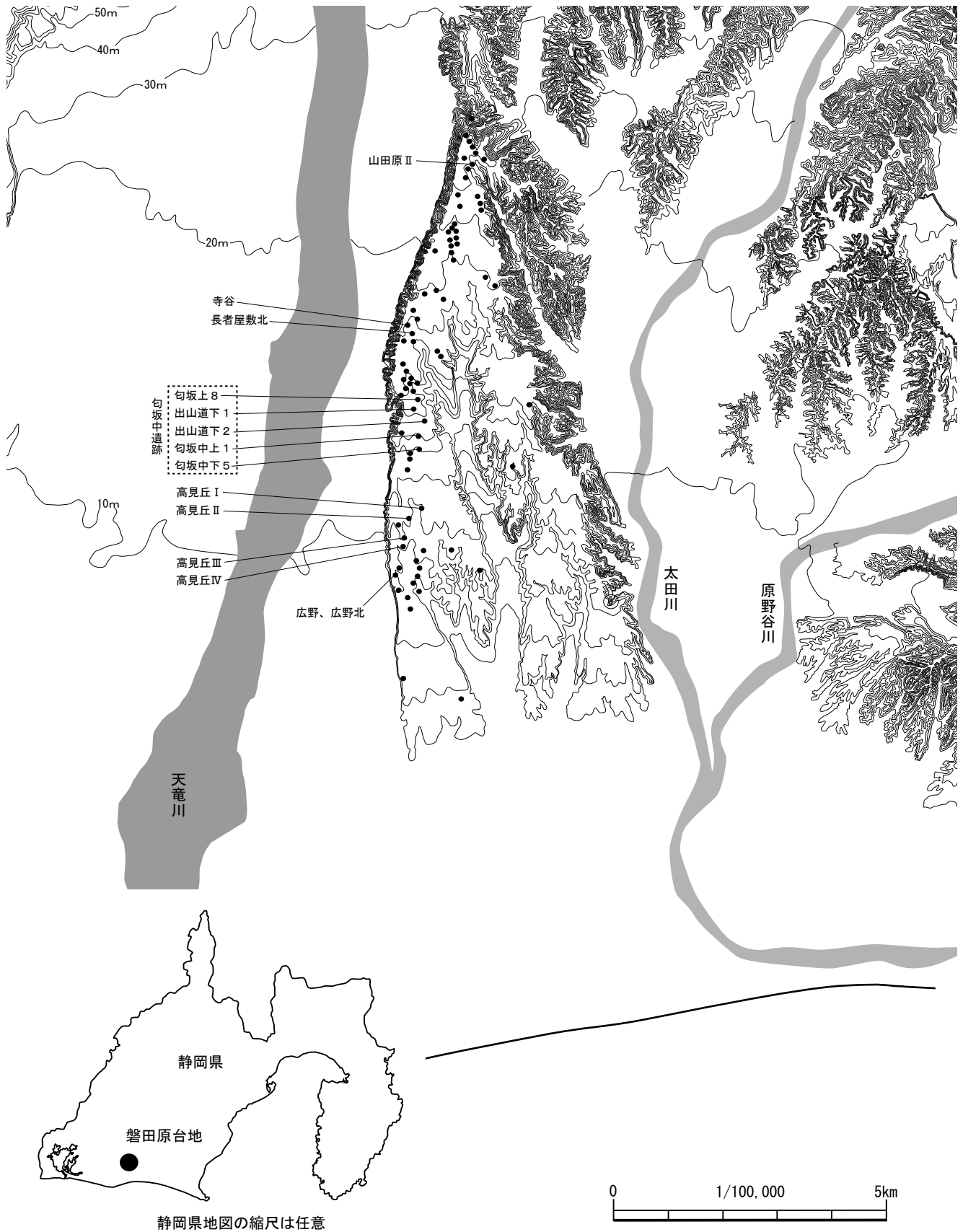


図1 磐田原台地の地形と遺跡分布

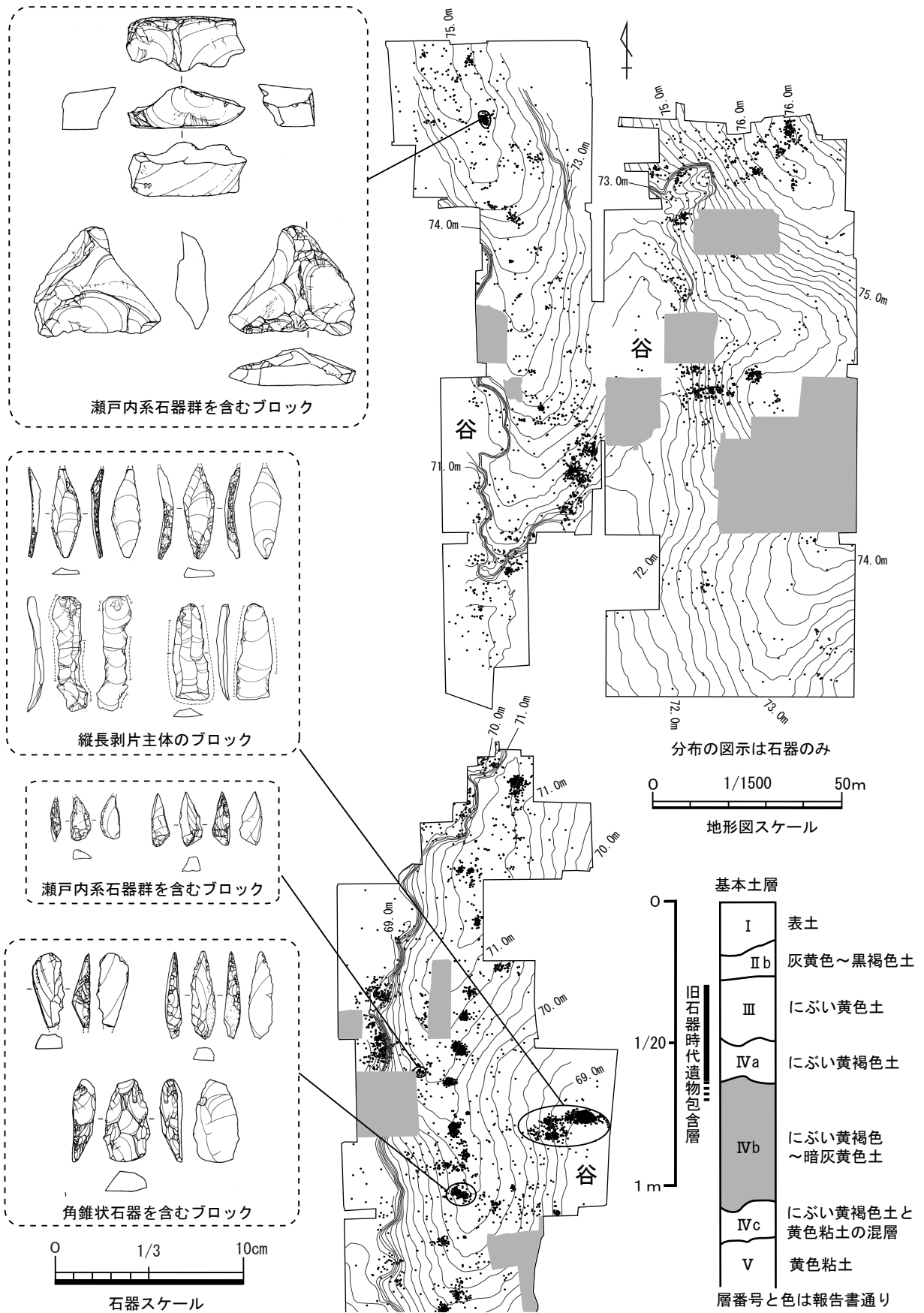


図 2 匂坂中遺跡の石器分布状況

ったが、整理作業での詳細な検討を通じて、単一ブロック、礫群でも遺物の出土レベルにかなりの差があり、石器で30～40cm、礫で10～20cmのレベル差があることは通例であることが判明し、出土レベルによる時期区分は不可能という結論に達したと報告書（鈴木1994）に書かれている。

この後、筆者は高見丘Ⅲ遺跡・Ⅳ遺跡を調査する機会に恵まれた（富樫1998）。旧石器時代の遺物包含層は、匂坂中遺跡と同様に2層で、暗色帯とその上に堆積した黄褐色土から出土した。ブロックや礫群がレベル差を持ちながら連続して出土し、出土レベルによる文化層分離は、現地調査の段階で不可能と判断した。

そこで、文化層に代わる概念として、同時期と考えられる遺構、遺物の集合体である「エリア」が提唱され（鈴木1994）、層位的に文化層を認定できない当地では、今も有効な資料操作となっている。

2 広野北遺跡の評価

当地の旧石器時代研究史で、最初の画期になるのは1977年～1978年に行われた寺谷遺跡の発掘調査（鈴木1980）である。調査範囲は400㎡弱だが、徹底した石器の接合作業と個別別分類により、接合関係と個別別資料の分布が、調査区内の二箇所にとまるところを明らかにし、それぞれで出土した石器の内容が類似することや、2箇所の石器分布範囲内に礫群や配石が同じように含まれることから、等質な二つの集落が隣り合うようにして存在したと解釈した。この調査は、集落復元を目的としていたため、見事にその目的を果たしたことになる。

これに続いて行われたのが広野北遺跡の調査（山下1985）である。広野北遺跡は磐田市高見丘²⁾にあり、3次に渡って調査された。このうち1982年に行われた第3次調査が、小学校建設に伴う本格的な発掘調査で、本稿での再検討の対象である。

調査範囲は13,000㎡で、そのうち遺物の分布密度が濃い「中央区」とされた部分の6,000㎡が報告されている。

この遺跡では、当地で初めて文化層が分離され、「細石器文化」、「尖頭器文化」、「ナイフ形石器文化（K2）」（以下、K2文化層とする）、「ナイフ形石器文化（K3）」（以下、K3文化層とする）の4枚の文化層が報告された。「尖頭器文化」が報告されたのと、ナイフ形石器³⁾文化が層位的に分離されたのは、現在でもこの遺跡だけである。

発掘調査は、寺谷遺跡と同様に集落の復元に主眼が置かれており、各文化層での徹底した個別分類と接合

作業をもとに、礫群、配石とブロックの分析を行っている。多くの執筆者によって行われた分析は精緻、多角的かつ実証的で、寺谷遺跡で確立した資料操作を引き継ぎ、文化層ごとに集落構造の復元に成功している。もちろん、行動論が進んだ現在では別の解釈が可能だが、当時としては資料解釈、集落復元の最高峰と評価して良いであろう。

この遺跡では文化層が明瞭に分離されて報告されたため、当地における編年では非常に重視されている（進藤1996、高尾2006）。特にナイフ形石器文化の文化層が、明瞭な間層をはさんで上下の2層に分離できたとの報告と、下位文化層に当たるK3文化層が始良丹沢火山灰の検出ピークよりも下から出土したため、「南関東第Ⅱ期後半に比定し得ると考えられる。」と報告されたことから、K3文化層はAT下位で武蔵野ローム層の第Ⅵ層段階に相当するとされている。そして、ナイフ形石器文化の石器群としては、当地における最古の石器群と評価されている（高尾2006）。

K2文化層については石器の詳細な検討から、下記の3時期に区分して報告されている。

第Ⅰ期：横長剥片素材のナイフ形石器を含む時期（以下、K2-I期とする）。

第Ⅱ期：縦長剥片剥離技術が卓越し、ナイフ形石器に少数の尖頭器が伴う時期。

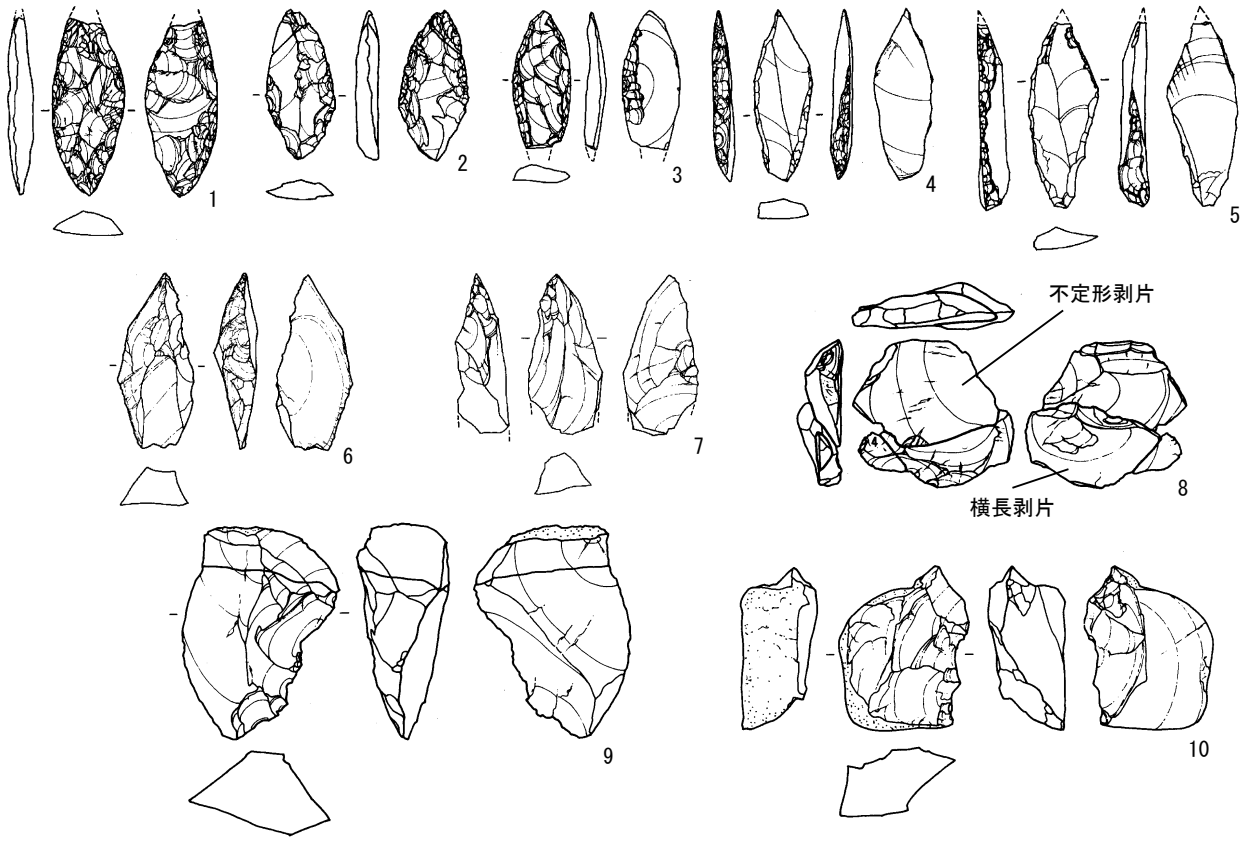
第Ⅲ期：石器群の主体がナイフ形石器から尖頭器に移った時期。

上記の報告からK2文化層は武蔵野ローム層第Ⅴ層～第Ⅳ層下層、第Ⅳ層上層～第Ⅲ層の各時期に渡る石器群から構成されていることになる。

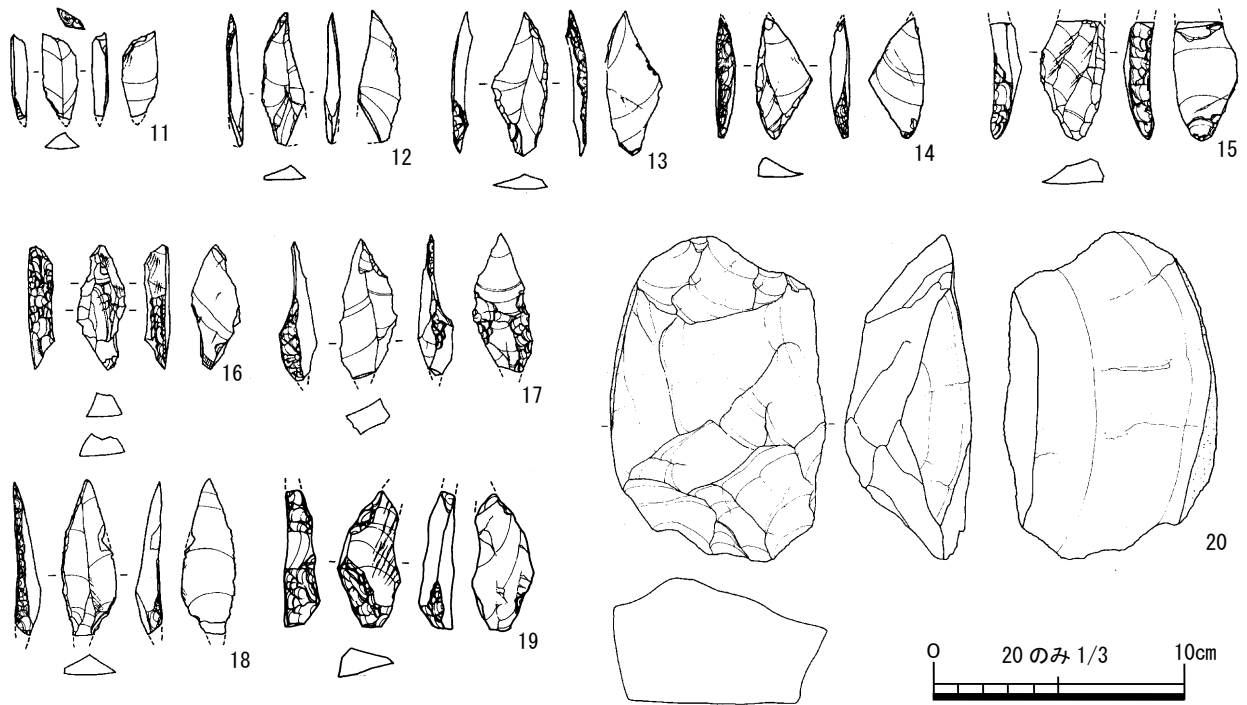
このようにAT直下の石器群以降、各時期に渡る文化層に整理して報告されているため、当地での編年を検討する上では指標的な遺跡と考えられている。

参考までにK2文化層とK3文化層で報告された石器を概観しておく（図3）。

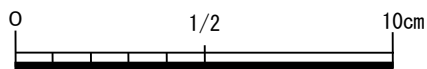
1～10がK2文化層で報告された石器である。1～3は尖頭器で、両面加工（1）と周縁加工（2、3）が出土している。これらは、尖頭器文化に属する尖頭器とは分布が異なることから、ナイフ形石器文化に属する尖頭器として報告されている。4、5は縦長剥片素材のナイフ形石器で、K2文化層の主体となる器種である。6～10は瀬戸内系石器群との関連をうかがわせる資料とされている。この中で6～9は同一個体に分類されている。6は横長剥片素材のナイフ形石器で、石核底面の打点が残っているため、ファーストフレイクを使っていることがわかる。7も横長剥片素材のナイフ形石器で、6と共に「瀬戸内地方との関連を



K2 文化層の石器



K3 文化層の石器



実測図はすべて報告書からの引用

図 3 K2 文化層と K3 文化層の石器

示唆する」と報告されている。

8は横長剥片と不定形剥片の接合資料である。9は横長剥片石核だが、瀬戸内技法⁴⁾との関連は薄いと報告されている。10も横長剥片石核で、これには横長剥片が接合しており、「瀬戸内技法との関係から翼状剥片石核と考えられる。」と報告されている。

11～20はK3文化層で報告された石器である。11は縦長剥片の一端を斜めに切断するように加工したナイフ形石器として報告されている。12～19は縦長剥片素材のナイフ形石器で、K3文化層の主体となる石器である。20は安山岩と思われる石材を使った横長剥片石核で「あたかも翼状剥片石核の観を呈する。」とされている。安山岩だとすると搬入石材と言うことになるが、風化が進んでいるため、断定はできない。

このように、両文化層は尖頭器の有無を除けば、よく似た石器群とすることができよう。ちなみに、K3文化層をAT下位の文化層と評価する際、横長剥片石核(20)の存在に言及した例はない。

3 報告書による文化層分離の検証

K2文化層は図2柱状図のⅢ層に相当する層(広野北遺跡では「2b層」)の下半、K3文化層は図2柱状図のⅣb層(広野北遺跡では「3層」、当地での通称「暗色帯」)に相当する層の下半から出土したと報告されている。分離の根拠は報告書30ページに下記のように記載されている。

「第3層から出土した遺物群は、全てナイフ形石器の時期に属する。平面分布は、第2b層のナイフ形石器群と全く軌を一にする。垂直分布では第2b層の一群とは明瞭な間層を狭⁷⁾んで分離されるものである。(中略)数多く発見することができた礫群の中心標高で垂直分布を検討すると、第2b層下半と第3層下半に各々分布の中心が来ることが一目瞭然である。このため、一応ここでは第3層下底面近くにこの遺跡が集中的に利用された一時期があると判断した。」

上記のうち「第2b層のナイフ形石器群と全く軌を一にする。」は現在のところ意味不明である。

また、同じ30ページに下記の記述もある。

「概報の段階では、第2b層から第3層にかけてナイフ形石器を指標とする三つの異なる時期があると判断していたが、これは第3層上半部に中心標高を持つ礫群の存在が知られていたためである。」

しかし、第3層上半部で出土した礫群は数が少ない上に、上下の文化層(K2文化層とK3文化層)との間に間層が認められる程のレベル差はなかったため、単

独文化層として分離することには困難と判断し、K2文化層に含めたとの記述がある。

上記の記載からうかがえることは、K2文化層とK3文化層は無遺物層をはさんで分離できたのではなく、遺物の出土ピークにレベル差があったためとわかる。また、上下の遺物出土ピークの間で出土した遺物をK2文化層に含める資料操作をしたことも読みとれる。

このように、報告書の文章を読む限りでは文化層分離に問題はないように思えるが、現在までに、匂坂中遺跡を始め、合計で10万㎡を超える大規模発掘が行われてきたが、間層の介在や出土レベル差を基にした文化層分離に成功した例はない。その中で広野北遺跡だけが文化層を明瞭に分離できたことは極めて稀な例ということになる。例外的に好条件が整っていたと考えることもできるが、その後に近接地で行われた広野遺跡の調査(清水1996)で、筆者は現地の地層を観察する機会に恵まれたが、文化層分離が可能な程に地層が発達しているとは考えられなかった⁵⁾。

そこで、改めて報告書を詳細に読み解いたうえでK2文化層とK3文化層を比較すると、下記の点を指摘できる。

① K2文化層とK3文化層の礫群で、近接している礫群、配石どうしで出土レベルを比較すると、間層を認定できないほどに近いレベルで出土しているものや、レベル差が非常に小さく、ほとんど同一平面で出土していると思われるものが複数認められる。

② K3文化層で報告された礫群の中に、K3文化層と認定する重要な鍵層である3層(暗色帯)が存在しない部分で出土した礫群が含まれている。

③ 個別別資料の一覧表を見ると、个体番号「K2-3F12」は、K2文化層ブロック3とK3文化層ブロック3にまたがって分布している。また、「K2-3F14」はK2文化層のブロック1とK3文化層のブロック1にまたがって分布している。さらに、个体番号「K2-3H36」はK2文化層のブロック16とK3文化層のブロック11に1点ずつあり、これらは接合している。

①については実例を示す(図4)。これはK2文化層とK3文化層で報告された礫群で、平面分布が近接しているもの同士について、報告書掲載の図面を合成して出土レベル差を比較したものである。

上段はK2文化層の礫群7とK3文化層の配石12の比較で、地形の傾斜による投影誤差を考慮して南側と東側の両面に投影してある。南側の投影面に示したように、礫群7の出土レベルの傾斜から、地形が傾斜していることがうかがえる。そして、K3文化層で報告された配石12はこの傾斜面上に乗っていることも

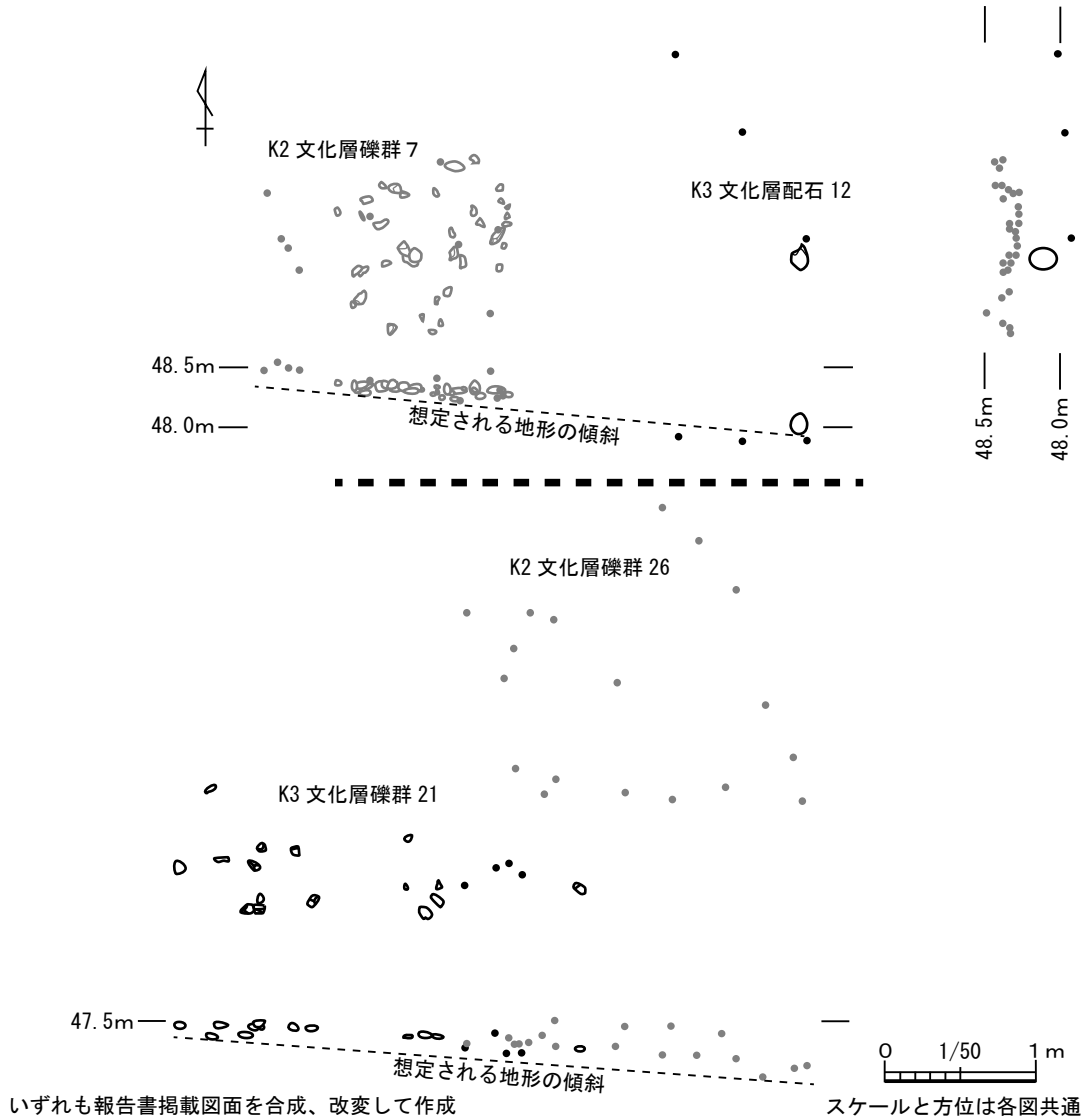


図 4 礫群、配石出土レベルの比較

うかがえる。したがって、K2 文化層の礫群 7 と K3 文化層の配石 12 は同一平面で出土していることが考えられる。ただ、報告書には「全体を均等に掘り下げていった。」と書かれていることから、地形の傾斜に沿って掘削したのではなく、水平に掘削していたと考えられる。その場合は礫群 7 が最初に出土し、その後、掘り下げたところで配石 12 が出土したと考えられる。しかし、その場合でも礫群 7 の調査後、すぐに配石 12 が出土した可能性が高く、間層をはさんで配石 12 が出土したとは考えにくい。

下段は K2 文化層の礫群 26 と K3 文化層礫群 21 の比較である。投影面を一見してわかるように、これらはほとんど同一平面で出土していると言って良い。投影図から想定される地形の傾斜に沿って掘削したとしても、報告書の記載通り水平に掘削したとしても、両

者は同時に出土したと思われる。この場合、礫群 26 と礫群 21 の間に間層を認めることはできない。

上記のような状況で出土した礫群、配石を文化層別に分けた根拠は、報告書からは読み取れない。

もちろん、間層を介在していると判断できるものもあるが、非常に少ない。むしろ、レベル差がありながらも上下に連続して出土しているか、ほとんど同一レベルで出土しているものが多い。

③については、間層を挟んで分離した文化層間での個別別資料の共有と接合は、静岡県駿東郡長泉町にある向田 A 遺跡（富樫 2007）で確実な例があるため、否定はできない。しかし、広野北遺跡が報告された 1985 年当時、個体の共有や接合関係の存在は同時期と判定する根拠であり、寺谷遺跡と広野北遺跡で行われた集落復元は、このことが前提になっている。した

がって、K2 文化層と K3 文化層での個別別資料共有と接合関係の存在に言及しなければ、両文化層の分離は不可能と思われるが、報告書では、個別別資料の一覧表に掲載されたのみで、文章中では触れられていない。また、研究史上でも、K3 文化層を評価する際に K2 文化層との個別共有と接合に言及した例はない。

上記のように、K2 文化層と K3 文化層は間層を挟んで明瞭に分離できたと書かれてはいるものの、報告書にそのことを示すデータは掲載されておらず、報告書に掲載された事項に基づく検証では、一部の礫群、ブロックを除いて、間層をはさんで上下に分離できるような状況は確認できない。

ここまでは報告書で公表された事項を基に K2 文化層と K3 文化層の分離について検証したが、この段階ですでに複数の問題があることを指摘した。この問題を解決するには報告書に基づく検討だけでは不可能である。と言うのは、報告書にはブロック、礫群、配石の出土層を示すデータが掲載されていないため、客観的な検証ができないからである。そこで、未公表データも活用して遺物の出土状況を復元し、実態がどのようであったのかを示す必要がある。

その前に調査直後に出された概報（山下 1983）と報告書を比較することで、K2 文化層と K3 文化層を設定した経過をたどることとする。概報には現地調査の見解が示されていると思われるからである。

4 概報と報告書の比較

広野北遺跡の調査は 3 次に渡って行われており、今回検討する第 3 次調査が小学校建設に伴う本格的な発掘調査で、1982 年 5 月 11 日～12 月 23 日に行われている。そして、翌年 1983 年 3 月には概報（山下 1983）が刊行されている。まずは、概報を通じて現地での所見を確認する。

文化層の認定について、概報では下記のように書かれている。

「2b 層中には少なくとも 3 つの文化階梯が、2b～4 層にかけては少なくとも 3 つのナイフ形石器文化段階の生活面が考えられる。2b 層中からは、細石器文化と尖頭器文化・ナイフ形石器文化に属する遺物が発見されており、いずれも 2b 層下半部が主たる包含層と考えられる。ナイフ形石器文化に属する他の二つの生活面は、3 層上半部と、3・4 層境界面に求めることができる。」（地層の番号は報告書の番号に改変）

この記載からうかがえることは、概報の段階では「ナイフ形石器文化」の文化層を 3 枚想定しており、それぞれ出土レベルを 2b 層下半、3 層上半、3 層と 4 層の境界付近と考えていることである。このことは土層断面図（図 5）にも表れており、概報では、遺物は 2b 層～4 層上部で出土したことになる。一方、同図に報告書での文化層検出範囲を併記したが、概報記載の文化層範囲と大きく異なっている。概報では、ナイフ形石器文化に属する遺物が 2b 層～4 層で連続して出土したように書かれているのに対して、報告書

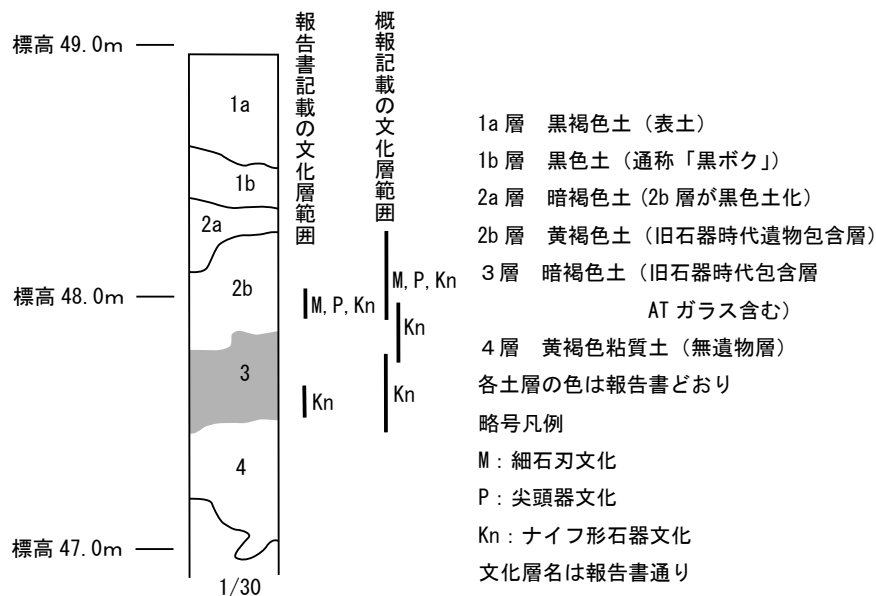


図 5 概報と報告書の文化層比較

では、ナイフ形石器文化に属する遺物の出土層が間層をはさんで2層に分かれている。このことから、K2文化層とK3文化層を分けた間層は現地調査で認定したのではなく、その後の整理作業の段階で認定した可能性が高い。そして、整理作業を通じて文化層認定に関する考えが大きく変わったことが考えられる。少なくとも2b層中の文化層を調査後、間層を掘削し、3層中で別の文化層を検出したと言った状況は概報、報告書のいずれにも書かれていない。

また、図3-6の横長剥片素材のナイフ形石器と10の横長剥片石核について、報告書では、6は「瀬戸内地方との関連を示唆する」とされており、10は「翼状剥片石核と考えられる。」と報告されている。これらの石器は、概報では3層出土となっているが、報告書では、2b層から出土したことになっており、K2文化層のK2-I期で報告されている。一方、図3-20の横長剥片石核は「翼状剥片石核の観を呈する」と報告されており、概報、報告書共に3層出土となっている。そして、K3文化層の石器として報告されている。ということは、瀬戸内系の石器がK2文化層とK3文化層の両方に存在することになり、両文化層が層位的に分かれたとしても、時期的に分かれるのか、検討の余地が残されていることになる。K3文化層は「南関東第Ⅱ期後半に比定し得る」と報告されたことから、AT下位、武蔵野ローム層の第Ⅵ層段階と考えられてきたが、K3文化層にも瀬戸内系の石器が存在することから、このことだけをとりても、K3文化層の時期的評価には再検討の余地が生じることになる。

以上、概報と報告書を比較したが、概報での文化層の想定と報告書での文化層の認定に大きな変更があったとうかがえること、K2文化層とK3文化層を分けた間層は、現地調査の段階では認識しておらず、整理作業を通じて認定したらしいことがうかがえる。

以上が、公表されている資料による検討で、K2文化層とK3文化層の分離について複数の疑問があることは指摘できたが、それらの解消は、公表資料による検討だけでは限界がある。先述したように、ブロック、礫群、配石の出土層を示すデータが報告書に掲載されていないためである。

これ以上の検討をするには、未公表データを含めて現存する資料から遺物出土状況の実態を明らかにする必要がある。特にブロックの平面図と土層断面への投影図、礫群、配石の断面図と出土層との関係を明らかにしなければ、遺物出土状況の実態を踏まえた検討はできない。

5 遺物出土状況の検討

最初にK2文化層とK3文化層の遺物の出土状況、調査区内の地形を確認しておく(図6)。図示した等高線は、調査前のものだが、これまでの調査で、現地形と旧石器時代の地形を比較すると、全体的には大差ないと考えて良い(鈴木1994、鈴木・竹内1996、富樫1998など)ため、広野北遺跡の旧地形も図示した等高線と同様の地形だったと考えられる。

地形は、調査区の中央付近に南北方向の丘陵があり、調査区の東西は谷に向かう緩斜面になっている。遺物は丘陵上～谷に向かう斜面でも出土しており、当地での一般的な出土状況を示している。

(1) 石器の出土状況

石器の出土状況については、全体分布図が別図として報告書に添付されているが、ブロック別の平面図、断面投影図は公表されていない。また、現存する資料にブロックに関する図面は存在しない。そこで、遺物台帳と土層断面図を基にブロックの平面図と土層断面投影図を作成した。

最初に一例として、K2文化層ブロック3の出土状況を検討する(図7)。このブロックには、概報と報告書で出土層が異なっていた瀬戸内系石器に関連する資料が含まれており、実際の出土層を検討することができる。

報告書では、K2文化層の遺物は2b層で出土したと書かれているため、その通りであれば、すべての石器は2b層に投影されるはずだが、断面投影図を作成すると、3層(暗色帯)に投影される石器がある⁶⁾。投影した土層図は、ブロックを横断するように作成されているため、離れた土層断面図に投影した場合に生じる、地形の傾斜による投影レベルの誤差はないと考えて良い。

1～7は瀬戸内系石器と関連があると報告された石器とそれらに接合する石器である。1と2は横長剥片素材のナイフ形石器で、1は、先行剥離面に石核の素材になった剥片の打点が残っていることから、ファーストフレイクを使っていることがわかる。3は横長剥片石核で、4は不定形剥片だが、5は横長剥片で、4と5は接合する。6は不定形剥片石核だが、7の横長剥片石核と接合する。

これらのうち2、3、6は2b層に投影されるため、報告書の2b層出土という記載と整合するが、1と4は明らかに3層に投影され、5と7は2b層と3層の境界付近、厳密には3層に投影される⁷⁾。

上記の検討から、下記の点を指摘できる。

- K2文化層のブロック3は、報告通りであれば、全石器が2b層出土のはずだが、2b層～3層にまたがって出土している可能性が高い。
- 第7図-1、7は、概報で3層出土、報告書で2b層出土と報告されているが、実際には3層で出土した可能性が高い。

ここでは1つのブロックを取り上げたが、これだけをとっても報告された内容と実際の出土状況が合わないことを指摘できる。

次に他のブロックの出土状況を検討する(図8)。

K2文化層ブロック5はほとんどの石器が2b層に投影されるため、これは報告書の記載通り2b層出土

のブロックと考えて良い。これと同様に2b層出土と考えて良いブロックは下記がある。

ブロック4、8、14、15

K2文化層ブロック6は2b層に主体がありながらも出土レベルの上下差が大きいいため、3層に投影される石器も認められる。このように2b層～3層にまたがっているブロックには下記がある。

ブロック3、6、10、16、17、18、19、22

2b層～3層にまたがる原因は2つある。1つ目は2b層と3層の境界付近で出土しているため、両層にまたがっていること。実例としてはブロック16、17、18がある。2つ目は2b層に中心があっても出

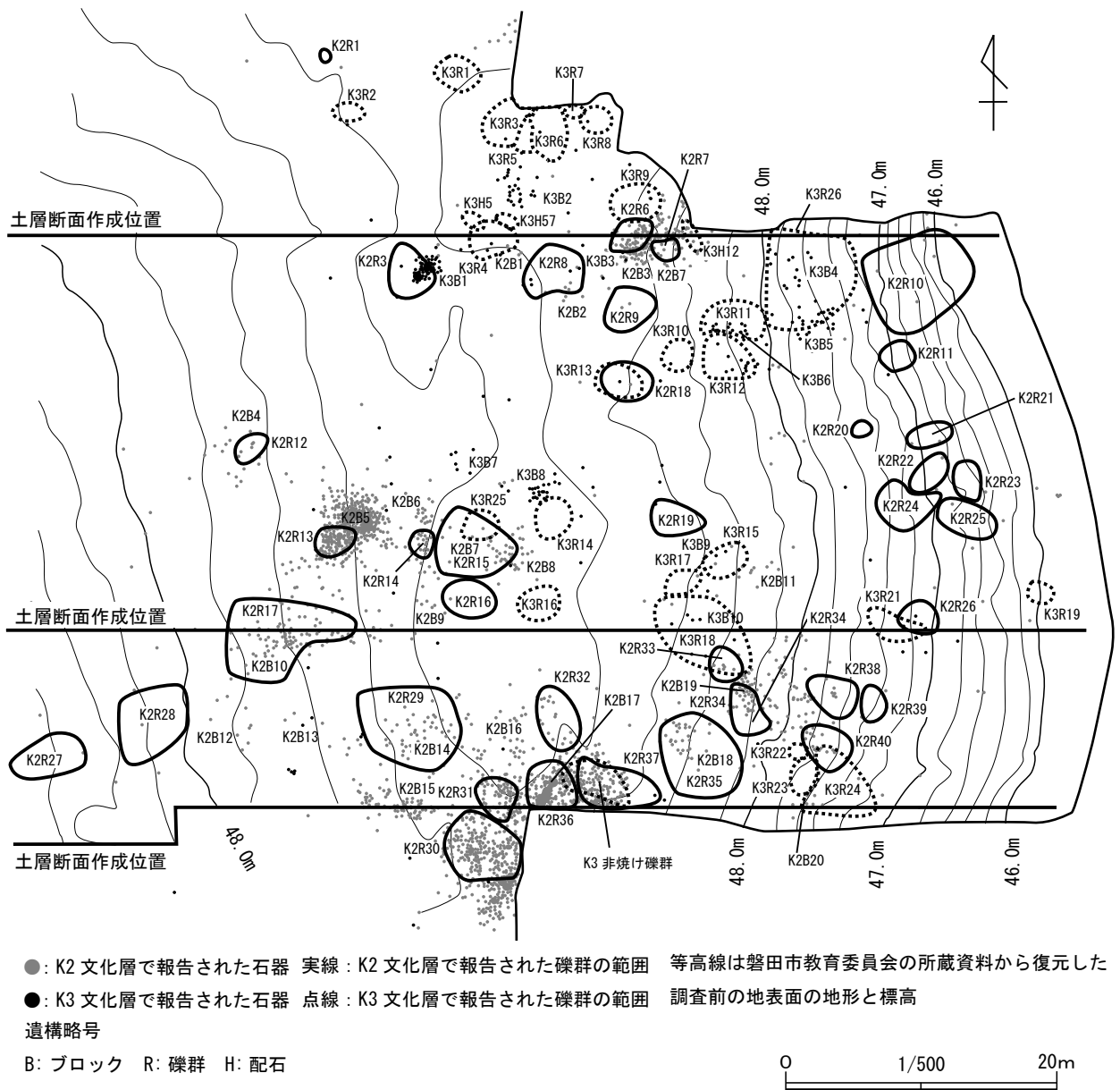


図6 K2文化層とK3文化層の遺物分布図

土レベルの上下幅が大きいいため、2b 層だけに収まらずに 3 層からも出土していることである。実例としてはブロック 3、6、10、19 がある。

上記のことから、K2 文化層で報告されたブロックは、報告書ではすべて 2b 層中からの出土となってい

るが、ほぼ半数のブロックは 2b 層～3 層の 2 層にまたがっている可能性が高いと考えられる⁸⁾。

K3 文化層ブロック 8 は 3 層下半に主体があるが、出土レベルの高い一部の石器は 2b 層に投影される。K3 文化層ブロック 7 はすべての石器が 3 層に投影さ

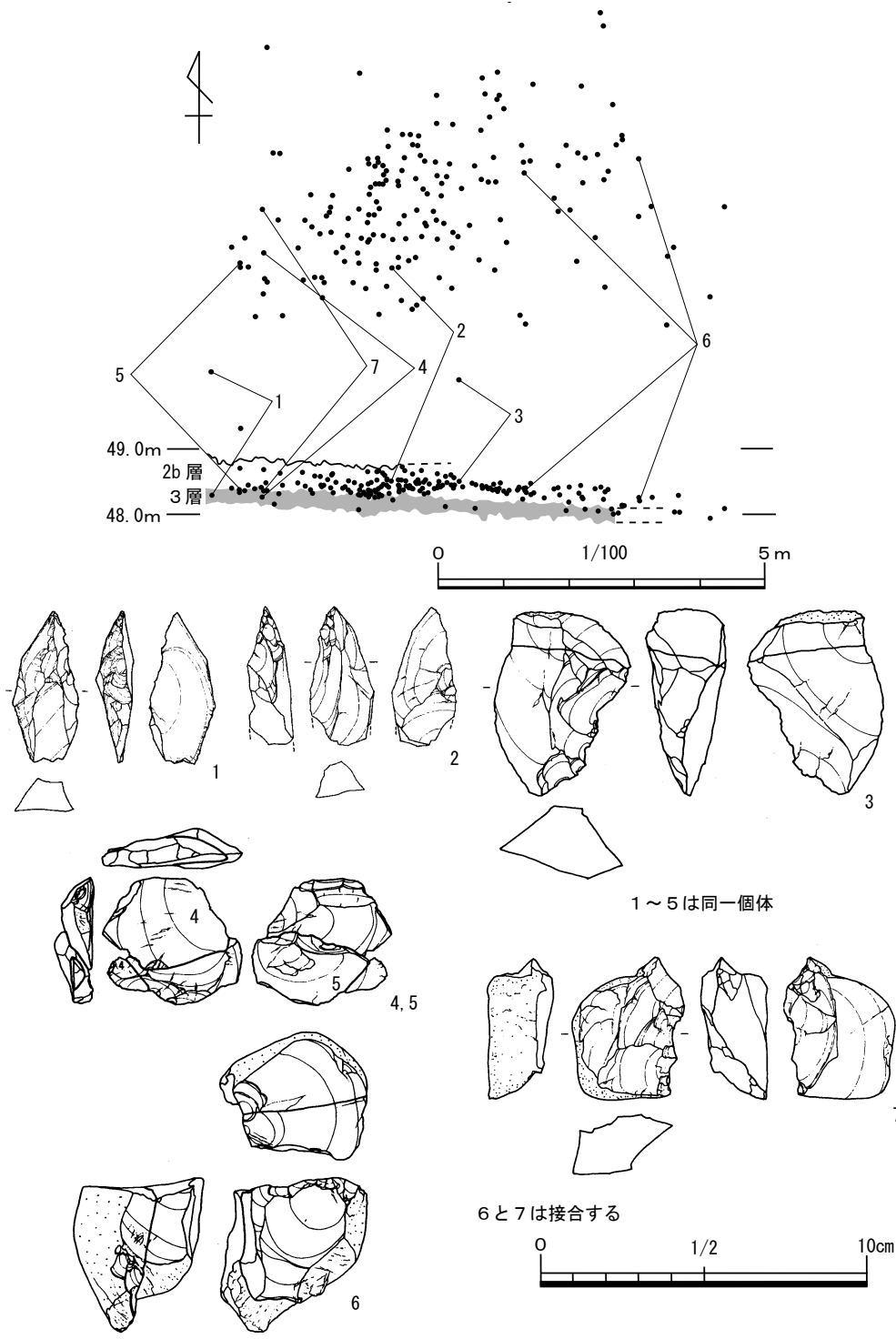


図 7 K2 文化層ブロック 3 の遺物出土状況

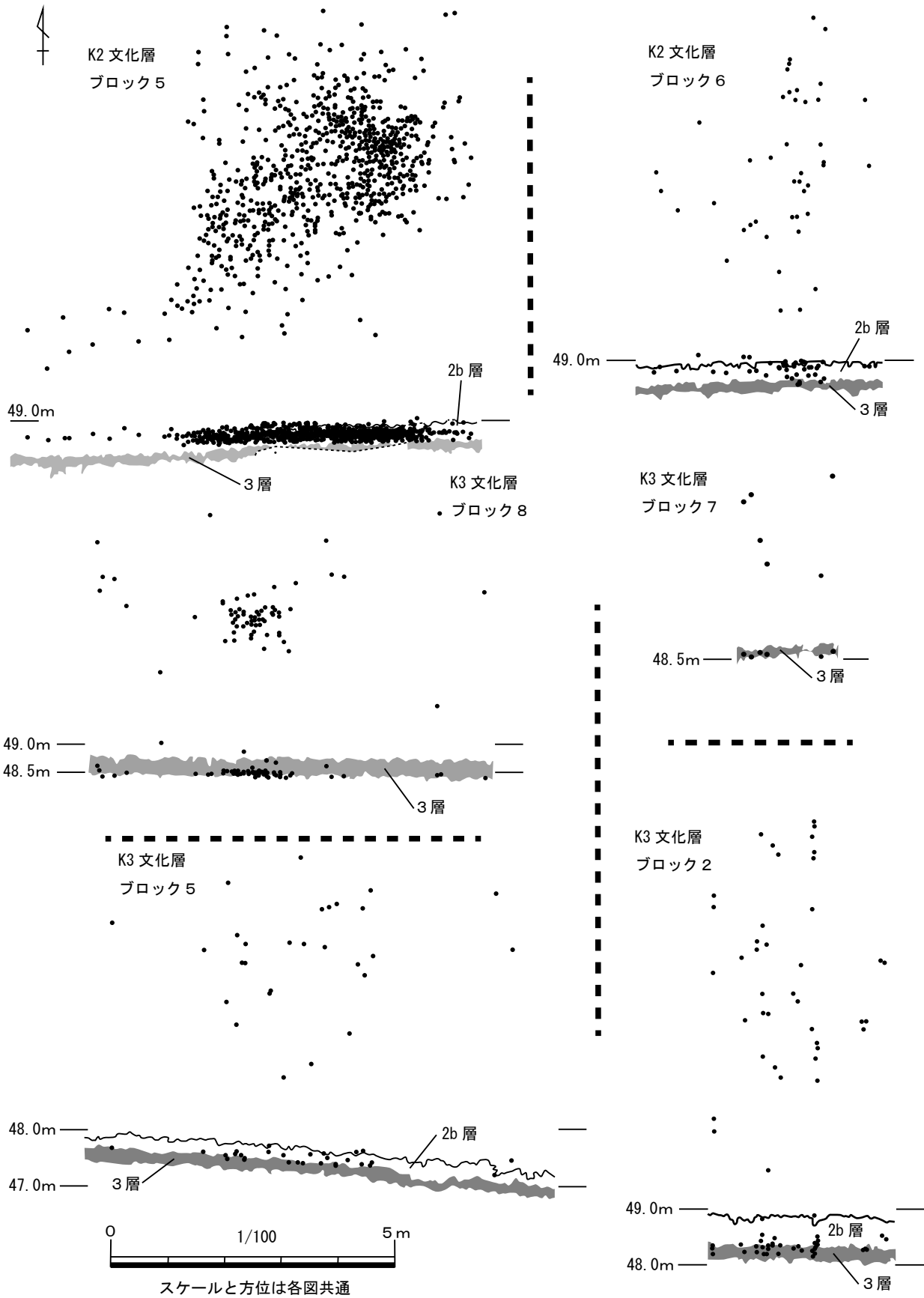


図8 K2・K3文化層ブロックの出土状況

れるため、これは報告通りである。ブロック 2 とブロック 5 は 2b 層と 3 層の境界付近に投影され、多くの石器は 2b 層に投影される。同様に 2b 層～3 層で出土しているブロックは下記がある。

ブロック 1、4、6

K3 文化層のブロックは、全体的に出土レベルの上下差が大きいため、すべての石器が 3 層に投影されるブロックは 7 だけで、その他のブロックは 2b 層～3 層にまたがって投影される⁹⁾。

このように K3 文化層のブロックは、報告書では 3 層出土となっているが、断面投影図を作成したところでは、多くのブロックが 2b 層～3 層の 2 層にまたがって出土している可能性が高い。

上記のように、K2 文化層のブロックと K3 文化層のブロックは、報告書では 2b 層と 3 層で明確に分けてあるが、2b 層～3 層にまたがるブロックが多く、出土レベルを基に文化層別に分けることは非常に困難と考えざるを得ない。むしろ、2b 層～3 層の様々なレベルでブロックが出土し、両層にまたがるブロックも珍しくないと言うことは、現在の認識では、当地における一般的な出土状況である。

これまでの検討から、報告書 30 ページにある「第 3 層から出土した遺物群は、(中略) 垂直分布では第 2b 層の一群とは明確な間層を狭⁷⁾んで分離されるものである。」という状況は認めることができない。

(2) 礫の出土状況

礫群についても平面図と土層断面投影図を基に出土状況を検討する(図 9)。報告書では礫群と配石の断面図は掲載されているが、土層が記入されていないため、出土層の検討ができないからである。

K2 文化層礫群 7 は、すべての礫が 2b 層に投影されるため、これは報告通りである。投影した土層断面も礫群に近接しているため、投影誤差を考慮する必要はない。これに対して K2 文化層礫群 16 は 2b 層と 3 層の境界付近に投影され、半数ほどの礫は 3 層に投影される。投影した土層断面は礫群に近接しているため、地形の傾斜による投影誤差はないと考えて良い。したがって、報告書では 2b 層出土となっているが、実際には 2b 層と 3 層の境界付近で出土しており、両層にまたがっていた可能性が高い。

ここでは 2 つの例を挙げたが、K2 文化層で報告された礫群の出土状況を復元すると、2b 層内に収まるものと 2b 層～3 層にまたがるもの、3 層に中心があると思われるものがある。出土状況を復元した結果は下記のとおりである¹⁰⁾。

すべての礫が 2b 層に投影される礫群

礫群 1、3、7、8、9、10、11、17、19

25、27、28、29、31、32、35

2b 層～3 層の両層に投影される礫群

礫群 12、13、14、15、16、18、26、30、34、36、38、40

主として 3 層に投影される礫群

礫群 21、22、23、24、39

このように、報告書通りすべての礫が 2b 層に投影され、2b 層から出土していることを確認できる礫群がある一方で、2b 層と 3 層の境界付近に投影され、両層にまたがる礫群も多数見られる。さらに多くの礫が 3 層に投影される礫群もある。礫群によっては土層断面図まで投影距離が数 m に及ぶため、地形の傾斜による投影誤差が生じていることは考慮しなければならないが、図 6 に示したように、南北方向での傾斜は小さいことと、いずれの礫群も投影範囲が 2b 層～3 層にほぼ収まっていることから、出土層の判断を間違え程度の誤差は生じていないと思われる。

少なくとも、K2 文化層の礫群はすべて 2b 層出土と報告されているが、2b 層～3 層の境界付近で出土し、両層にまたがる礫群が多数存在することは間違いないであろう。

K3 文化層礫群 3、5、6 は 2b 層と 3 層の境界付近で出土しており、2b 層と 3 層の両層に投影される。投影した土層断面まで 5 m 程の距離があるが、これらの礫群が出土した場所はほぼ平坦面のため、投影誤差は非常に少ないと考えられる。少なくとも、礫出土レベルの上下差が 3 層の厚さよりも大きいことから、報告書に書かれた通り、すべての礫が 3 層内に収まることは、理屈の上でもあり得ない。

K3 文化層礫群 19 は、図示したように 2b 層、3 層共に存在しない所で出土している。つまり、旧石器時代の遺物包含層が存在しない場所で出土しているのである。礫が含まれていたのは、2b 層の上にある 2a 層(縄文時代以降の包含層と旧石器時代包含層の間にある漸移層で、縄文時代以降の遺物と旧石器時代の遺物の両方を含んでいることが多い)で、その層の下に旧石器時代の包含層である 2b 層、3 層が存在せず、その下層の 4 層が露出している。礫群 19 は 2a 層と 4 層の境界付近で出土したと思われる。この礫群は K3 文化層で報告されているが、この場合、本来は所属文化層を判断できないはずである。

ここでは 2 つの例を示したが、K3 文化層の礫群で、報告と異なり、3 層に収まらないものが多く見られる。

K3 文化層で報告された礫群の出土状況を検討した

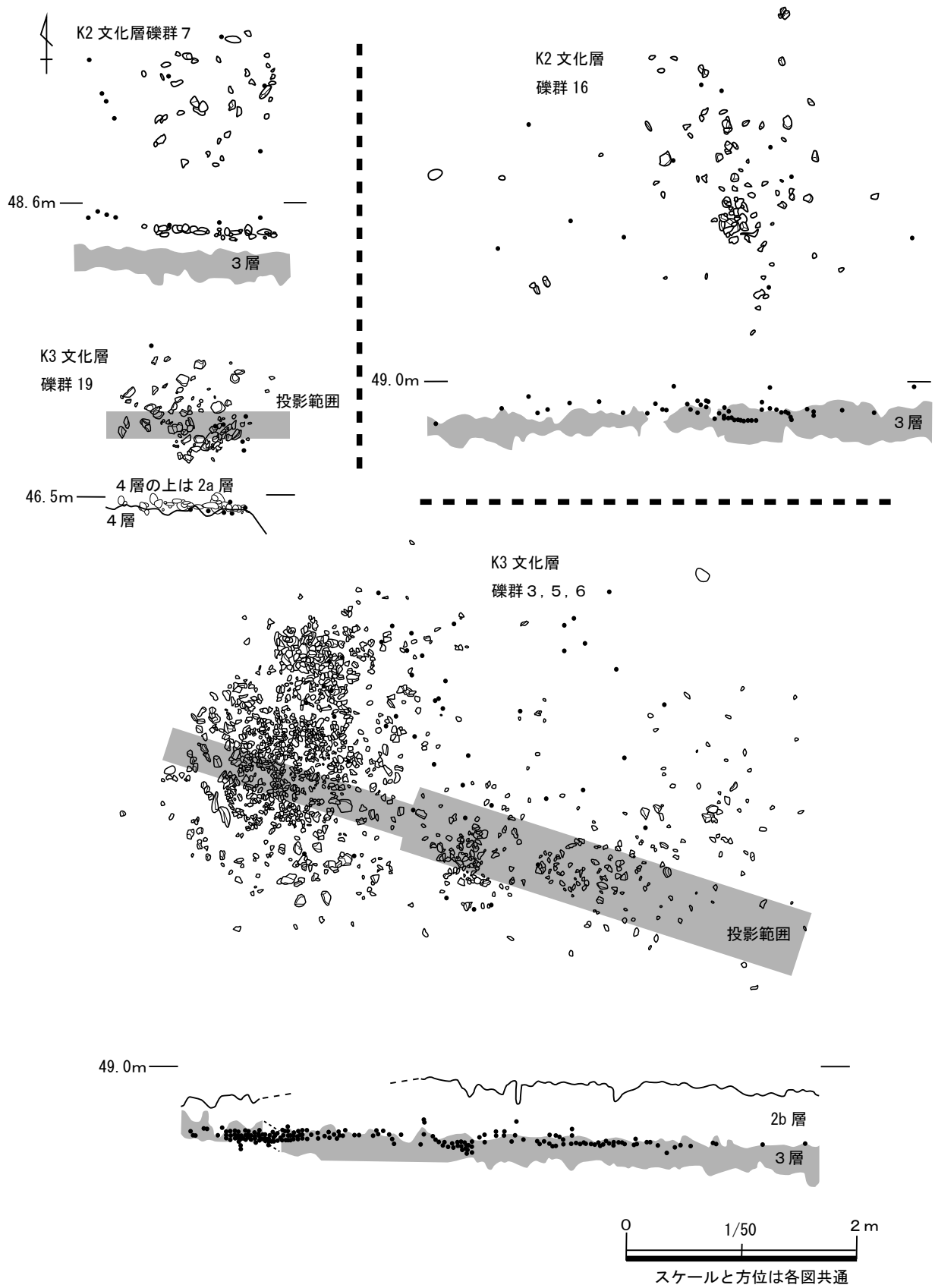


図9 K2・K3文化層礫群の出土状況

結果は下記のとおりである。

すべての礫が3層内に投影される礫群

礫群 1、2、8、9、14、16、17、18、22、23
24、25、26

2b層～3層の両層に投影される礫群

礫群 3、4、5、6、11、12、13、15

報告通りであれば、すべての礫群が3層に投影され、しかも3層下半に中心を持つ礫群が主体になるはずだが、3層下半が中心になる礫群は、礫群 1、8、9 だけである。したがって、K3 文化層で報告された礫群の出土状況は、報告書の記載とは相当に異なる可能性が高い。

このように、K2 文化層、K3 文化層のいずれの礫群でも 2b 層～3 層にまたがる礫群が多数あることから、総じて見ると、礫群は、2b 層から 3 層にかけて様々なレベルで出土している可能性が高い。

したがって、報告書 30 ページにある「礫群の中心標高で垂直分布を検討すると、第 2b 層下半と 3 層下半に各々分布の中心が来ることが一目瞭然である。」と言う状況は認めることができない。むしろ、2b 層～3 層の様々なレベルで出土することは、現在の認識では、当地での一般的な状況である。

(3) 間層の検証

これまでの検討で、石器、礫とも 2b 層～3 層にかけて様々なレベルで連続出土している可能性が高くなった。したがって、K2 文化層と K3 文化層を分けたとされる間層の存在を改めて検討する必要がある。

遺物出土状況の実態を検討するために、K2 文化層と K3 文化層の遺物が平面的に近接して出土した K2 文化層礫群礫群 6、7、ブロック 3 と K3 文化層礫群 9、配石 12 の出土状況を示す (図 10)。

断面投影図を見ると、K2 文化層礫群 7 (グレートーンを入れた礫群) は 2b 層中で出土しており、K3 文化層礫群 9 (白抜き表示の礫群) と配石 12 (大きな黒丸) は 3 層中で出土している。そして、両者の出土レベルは明確に異なっており、K2 文化層礫群 7 の下に間層を介して K3 文化層礫群 9、配石 12 が出土していると言って良い。

しかし、間層とした層は無遺物層ではなく、ここに K2 文化層礫群 6 とブロック 3 が含まれている。先に指摘したように、ブロック 3 は 2b 層と 3 層にまたがっている。K2 文化層礫群 7 と K3 文化層礫群 9、配石 12 だけを見ると、間層をはさんで上下の文化層に分けることも可能と思われるが、その間層に入っている K2 文化層ブロック 3 と礫群 6 を上下どちらの文化

層に帰属させるかは別途検討が必要になる。2b 層から出土している礫群 6 は上の文化層に入れるとしても 2b 層と 3 層にまたがっているブロック 3 の帰属は決め難い。断面投影図を一見するとブロック 3 の主体は 2b 層中にあると判断できるため、2b 層中の文化層に入りそうだが、直下に K3 文化層礫群 9、配石 12 があり、礫群 9、配石 12 と同レベル、さらには K3 文化層の主体部分とされた 3 層下半で出土している石器も少なからずある。このように、ブロックの直下で礫群や配石が出土することは、当地ではよくあることで、筆者も高見丘Ⅲ遺跡 (富樫 1998) で経験している。この場合、わずかなレベル差があるとは言え、ブロックとその直下で出土した礫群、配石を別時期にはできないというのが、現在の認識である。このような当地での一般的な出土状況を考えると、ブロック 3 とその直下で出土した K3 文化層礫群 9、配石 12 を別の文化層にすることは相当な無理がある。

もっとも、当時の判断としてはブロック 3 の主体が 2b 層中にあると考えて、K2 文化層に帰属させたのかもしれない。しかし、その場合でも間層をはさんで上下の文化層に分けられるという記載とは整合しない。

いずれにしても、図 10 に示した出土状況は当地での一般的な状況を示しているに過ぎない。礫群 7 と礫群 9 のレベル差を根拠に上下の文化層に分けることが可能だとしても、その間で出土しているブロック 3 の所属は決め難い。

同様に K2 文化層の遺構と K3 文化層の遺構で、近接しているもの同士の出土状況を比較した図を示す (図 11、図 12)。

K2 文化層礫群 3 と K3 文化層ブロック 1 (図 11 上段) は、礫群 3 は 2b 層から出土しており、ブロック 1 は 3 層下半～4 層に投影されている。ブロック 1 の大部分が 3 層下半～4 層に投影されているのは、投影誤差と思われるが、投影した土層断面図はブロックに近接して取られているため、大きな誤差が生じているとは考えられない。この場合、3 層下面付近に分布の中心があると考えておけば良いであろう。したがって、礫群 3 とブロック 1 の間には間層が介在していると考えて良い。また、両者の間層から出土した遺物も少ないため、この場合は無遺物層をはさんでいると考えて良い。

このように、K2 文化層礫群 3 と K3 文化層ブロック 1 は間層をはさんで上下に分けることができる。このような状況は報告書に書かれた通りである。

K2 文化層礫群 15 と K3 文化層礫群 25 (図 11 下段) は、礫群 15 は 2b 層から出土しているが、分布の中

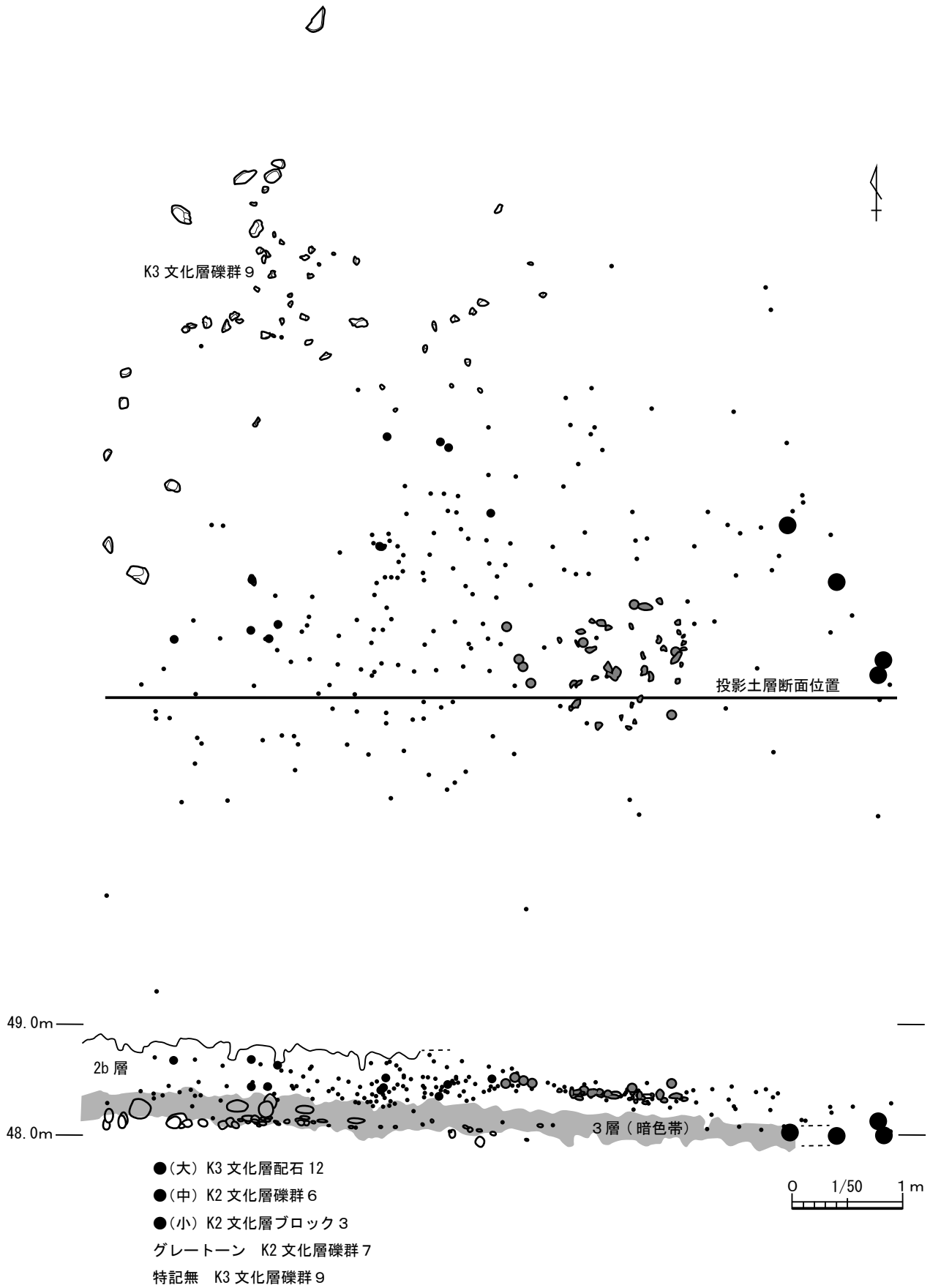


図 10 K2 文化層礫群 6、7、ブロック 3 と K3 文化層礫群 9、配石 12 の出土状況

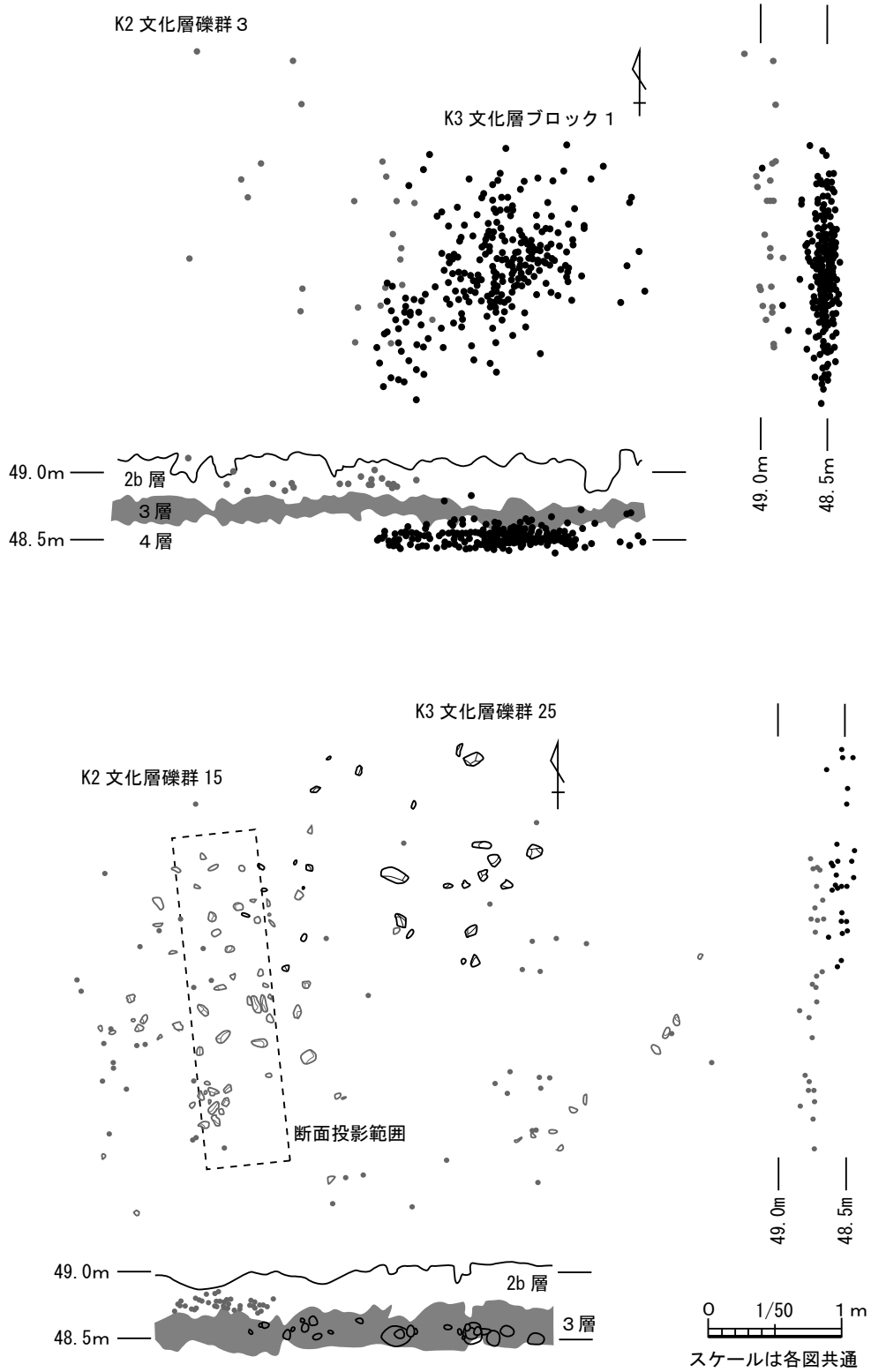


図 11 K2 文化層、K3 文化層近接遺構の出土状況 (1)

心は 2b 層の下部、3 層との境界に近く、一部の礫は 3 層上層にかかっている。一方、礫群 25 は 3 層から出土しているが、一部の礫は 3 層上部、2b 層との境界付近で出土している。このように、両者の出土レベルは近接しており、礫群 25 の礫の一部は礫群 15 の直下で出土している。このような状況では、両礫群の間に間層を認めることはできない。現場でこのような状況に遭遇した場合、両礫群を分けて記録できるかどうか迷うところである。

K2 文化層礫群 33 と K3 文化層礫群 18(図 12 上段)は、礫群 33 が 2b 層、礫群 18 が 3 層出土だが、出土レベルは非常に近接しており、ほぼ同レベルと言っても良い程である。報告書通り水平に掘削したとしたら、礫群 33 と礫群 18 のレベルが高い礫は、ほぼ同時に出土したと思われる。もちろん、この両礫群の間には間層を認めることはできない。

K2 文化層礫群 37 と K3 文化層の非焼け礫群(図 12 図下段)も同様で、礫群 37 は 2b 層出土、非焼け礫群は 2b 層～3 層出土だが、出土レベルは同一と言って良い。報告書の記載通り、水平に掘削して行けば、両者は同時に出土することになる。これについては、報告書の写真図版 5 の上段写真も検討する必要がある。この写真は、2b 層で出土した礫群、配石の分布状況を撮影したもので、2b 層で検出した礫群として礫群 37 が写っているが、隣接した非焼け礫群は写っていない。これは写真からおおよそ推定できることだが、この部分は地形の傾斜に沿って掘削しているため、礫群 37 が最初出土したものと思われる。しかし、この直後に非焼け礫群が出土したことは間違いのないと思われる。

このように、K2 文化層礫群 33 と K3 文化層礫群 18、K2 文化層礫群 37 と K3 文化層非焼け礫群は、出土層は異なっているものの、間層を介在している状況ではなく、報告書に書かれたように、間層をはさんで、あるいは、出土レベルの違いによって、別の文化層に分けられる状況ではない。また、K3 文化層の礫群の多くは、分布の中心が 3 層下半にあると書かれているが、K3 文化層礫群 18、非焼け礫群とも分布の中心は 3 層上半である。

上記で取り上げた礫群は出土層こそ違うが、時期が異なるとは限らない。ここで改めて、出土層が異なっても時期区分や文化層分離ができないことは、当地における現在の一般的理解であることを確認しておく。

いくつかの例をあげながら、K2 文化層と K3 文化層の間にあったとされた間層の存在を検討した。間層ははっきり認められたのは 1 例だけで、その他の 3 例

では認めることができなかった。

ここで、上記と同様に K2 文化層と K3 文化層の遺構間で出土状況を比較した結果を列記する。比較した遺構の場所は図 13 に示す。

①間層が認められる遺構

K2 礫群 8 と K3 配石 13

K2 礫群 8 の出土層：2b 層下半

K3 文化層配石 13 の出土層：3 層下半

間層の存在：3 層上半が間層になっている。

K2 礫群 3 と K3 ブロック 1

K2 礫群 3 の出土層：2b 層

K3 ブロック 1 の出土層：3 層下半

間層の存在：3 層上半が間層になっている。

②出土レベルが近接、もしくは同一レベルで出土しているため、間層が認められない遺構

K2 礫群 6、7、ブロック 3 と K3 礫群 9、配石 12

K2 礫群 6 の出土層：2b 層

K2 礫群 7 の出土層：2b 層

K2 ブロック 3 の出土層：2b 層～3 層

K3 礫群 9 の出土層：3 層

K3 配石 12 の出土層：2b 層～3 層

間層の存在：K2 礫群 7 と K3 礫群 9、配石 12 の間に間層があるが、間層に K2 礫群 6 と K2 ブロック 3 が含まれているため、2b 層～3 層で連続出土。

K2 礫群 40 と K3 礫群 22、23、24、配石 50

K2 礫群 40 の出土層：2b 層上半

K3 礫群 22、23、24 の出土層：3 層全体

K3 配石 50 の出土層：2b 層下半

間層の存在：2b 層～3 層で連続出土。

K2 礫群 13、配石 21 と K3 配石 21

K2 礫群 13、配石 21 の出土層：2b 層全体

K3 配石 21 の出土層：2b 層下半～3 層上半

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 15 と K3 礫群 25

K2 礫群 15 の出土層：2b 層下半

K3 礫群 25 の出土層：3 層

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 18 と K3 礫群 13、配石 25

K2 礫群 18 の出土層：2b 層

K3 礫群 13、配石 25 の出土層：3 層上半、2b 層

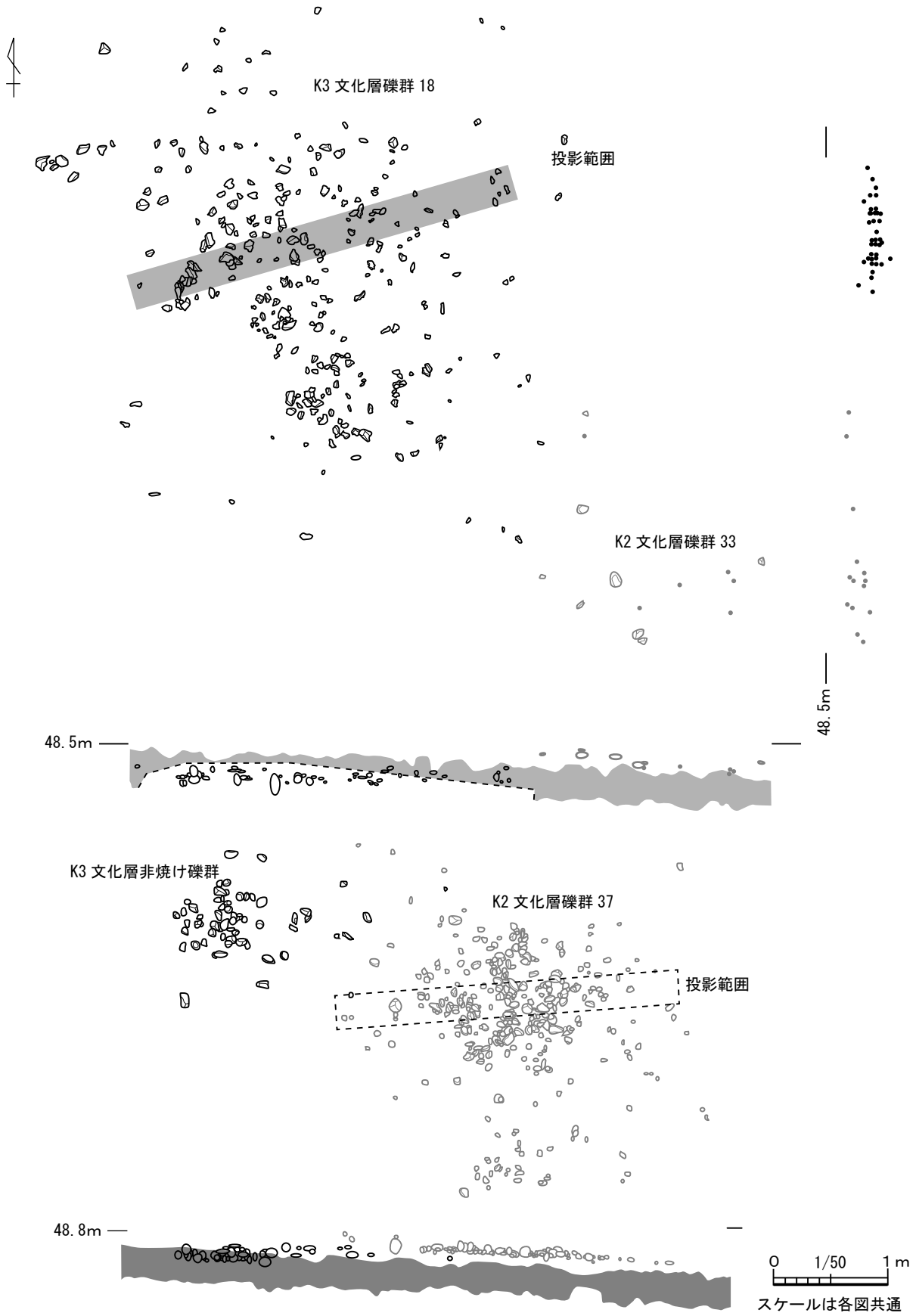


図 12 K2 文化層、K3 文化層近接遺構の出土状況 (2)

との境界付近

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 31 と K3 配石 43

K2 礫群 31 の出土層：2b 層下半

K3 配石 43 の出土層：2b 層と 3 層の境界

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 33 と K3 礫群 18

K2 礫群 33 の出土層：2b 層下半

K3 礫群 18 の出土層：3 層上半

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 35 と K3 配石 47

K2 礫群 35 の出土層：2b 層上半

K3 配石 47 の出土層：2b 層下半（K3 文化層での報告だが、2b 層に投影される）

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 ブロック 8 と K3 礫群 16

K2 ブロック 8 の出土層：2b 層～3 層

K3 礫群 16 の出土層：3 層

間層の存在：出土レベルは近接、間層なし

K2 礫群 26 と K3 礫群 21

K2 礫群 26 の出土層：2b 層～3 層

K3 礫群 21 の出土層：3 層

間層の存在：出土レベルはほぼ同一、間層なし

K2 礫群 29 と K3 配石 42

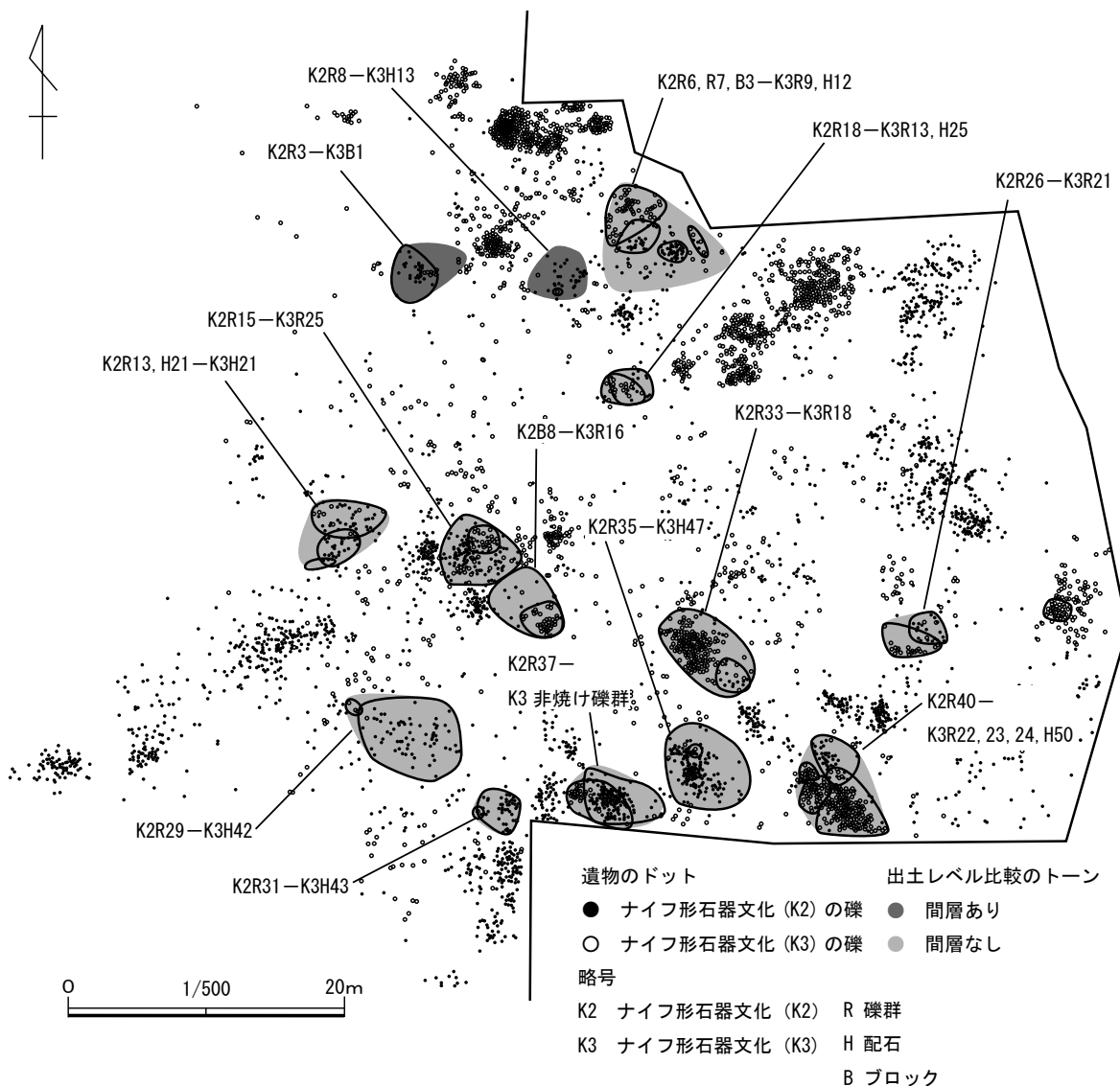


図 13 K2、K3 文化層遺構間での出土状況検討結果

K2 礫群 29 の出土層：2b 層下半
 K3 配石 42 の出土層：2b 層下半～3 層上半
 間層の存在：出土レベルはほぼ同一、間層なし

K2 礫群 37 と K3 非焼け礫群
 K2 礫群 37 の出土層：2b 層下半
 K3 非焼け礫群の出土層：2b 層下半～3 層上半
 間層の存在：出土レベルはほぼ同一、間層なし

以上、K2 文化層と K3 文化層で近接した遺構の出土状況から、両者間に間層が認められるか検討した。結果は、間層が認められたのは 2 例で、12 例は K2 文化層の遺構と K3 文化層の遺構の出土レベルが近接、もしくは同一レベルで、間層は認められなかった。

6 結論

広野北遺跡の「ナイフ形石器文化 (K2)」と「ナイフ形石器文化 (K3)」は、間層をはさんで分離できる、礫群の出土レベルは 2b 層下半と 3 層下半にまとまることが一目瞭然であるとして明確に分離できると報告された。

しかし、ブロック、礫群、配石の出土状況を復元して検討した結果、一部を除いて報告書に記載されたような出土状況は認めることができなかった。むしろ、旧石器時代の包含層である 2b 層～3 層の様々なレベルで遺物が連続して出土すると言う、当地での一般的な出土状況であることが判明した。

したがって、広野北遺跡でのナイフ形石器文化期の文化層分離はすべて白紙に戻し、全面的に再検討する必要がある。層位による文化層認定ができない当地では、匂坂中遺跡 (鈴木 1994、鈴木・竹内 1996) で提唱されたエリア区分を基本的資料操作として、これにブロックの重複形成 (富樫 2012) を加味して、文化層ではなく、「エリア」を設定することが有効である。

謝辞

本稿は 2014 年度に提出した学位申請論文の一部を改変したものである。本稿の執筆にあたりまして、佐藤宏之先生には、日頃から多くの御指導をいただきました。また、大貫静夫先生、設楽博己先生には、演習発表などを通じて多くの御教示をいただきました。

鈴木忠司先生には、広野北遺跡調査当時の状況を含めて、30 年以上に渡る磐田原台地での研究から、様々な御教示をいただきました。また、保坂康夫氏からも広野北遺跡調査当時の状況について御教示をいただくことができました。

磐田市教育委員会には、広野北遺跡に関する資料の閲覧に際して度重なる御配慮をいただきました。

以上の方々に厚くお礼申し上げます。

本稿は平成 24 年度科学研究費補助金 (課題番号 24904008) による成果を含んでいる。

[注]

- 1) 匂坂中遺跡は、出山道下 1 遺跡、出山道下 2 遺跡、匂坂中下 5 遺跡、匂坂中上 1 遺跡、匂坂上 8 遺跡からなる遺跡群に便宜上付けた名称である (鈴木 1994)。
- 2) 調査当時は磐田郡豊田町高見丘
- 3) 「ナイフ形石器」という器種については、再検討の余地が提唱されている (安斎 2007、安斎 2008、石器文化研究会 2011 など) が、本稿では報告書と用語の整合を図るため、ナイフ形石器の呼称を使う。
- 4) 瀬戸内技法については、定義が緩和された瀬戸内概念 (高橋 2001) が提唱されているが、本稿では報告書と用語の整合を図るため、瀬戸内技法の呼称を使う。
- 5) 広野遺跡 (清水 1996) では、同一レベルで複数時期に渡る石器群が混在して出土している。
- 6) 遺物台帳では、このブロックの石器はすべて 2b 層出土と記載されている。
- 7) 図 5-1 と 7 の出土層は、概報では 3 層出土となっており、遺物台帳にも 3 層出土と記載されているが、その後、台帳の記載が 2b 層に書き換えられている。
- 8) 遺物台帳で、K2 文化層に所属する石器の出土層は、ほとんどが 2b 層出土と書かれている。
- 9) 遺物台帳で、K3 文化層に所属する石器の出土層は、ほとんどが 3 層出土と書かれている。
- 10) K2 文化層礫群 20 については、報告書では断面図のレベルが「48.8m」となっているが、原図と照合したところ「47.8m」が正しい。しかし、土層断面図のレベルと整合しないためか、2b 層の上方に投影される。したがって、現段階では出土層に関する判断を保留する。

[引用文献]

- 安斎正人 2007 『『ナイフ形石器文化』批判 - 狩猟具の変異と変遷 (前編)』『考古学』V: 1-32
- 安斎正人 2008 『『ナイフ形石器文化』批判 - 狩猟具の変異と変遷 (後編)』『考古学』VI: 119-135
- 佐口節司・大村至広編 2009 『遠州広域水道用水供給事業寺谷浄水場築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会
- 清水尚編 1996 『広野遺跡 第 1 次』豊田町教育委員会
- 進藤貴和子 1996 「磐田原台地の石器群編年をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会, 51-52
- 鈴木忠司編 1980 『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』平安

博物館

- 鈴木忠司編 1994 『静岡県磐田市勾坂中遺跡群発掘調査報告書』
磐田市教育委員会
- 鈴木忠司・竹内直文編 1996 『静岡県磐田市勾坂中遺跡発掘調査
報告書Ⅱ』磐田市教育委員会
- 石器文化研究会 2011 「ナイフ形石器・ナイフ形石器文化とは何
か - 概念・実態を問い直す -」『石器文化研究』16:47-136
- 高尾好之 2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的
研究』同成社, 61-102
- 高橋章司 2001 「第6章 翠鳥園遺跡の技術と構造」『翠鳥園遺跡
発掘調査報告書 - 旧石器編 -』羽曳野市教育委員会, 193-221
- 竹内直文・渡邊武文編 2013 『高見丘遺跡群発掘調査報告書』磐
田市教育委員会
- 富樫孝志編 1998 『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研
究所調査報告 108
- 富樫孝志編 2007 『向田A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調
査報告 178
- 富樫孝志 2012 「静岡県磐田原台地における石器ブロックの重複
形成」『東京大学考古学研究室研究紀要』26:39-62
- 日本旧石器学会 2010 『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器
学会
- 松井一明編 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』袋井市教育委員会
- 武藤鉄司 1987 「天竜川下流地方, 三方が原・磐田原台地の地質
- 現在の開析扇状地からの解釈 -」『地質学雑誌』93 (4): 259-
273

- 山下秀樹編 1983 『広野北遺跡発掘調査概報』豊田町教育委員会
- 山下秀樹編 1985 『広野北遺跡発掘調査報告書』平安博物館

[挿図出典]

- 図1 大日本帝国陸地測量部2万5千分の1地形図「笠井」「見付」「袋
井」「山梨」を基に富樫作成
- 図2 鈴木1994の図番号8、100、329、438
鈴木・竹内1996の図番号80、88
遺物分布図は別添図2と3を合成
- 図3 山下1985の図番号141、142、144、199、200、202
204、267、300
- 図4 山下1985の図番号97と257、105と245を合成
- 図5 山下1983の図番号6
- 図6 山下1985の別添図14、16、25、27を合成、改変
- 図7 遺物実測図は山下1985の図番号144、199、200、204
遺物分布図は富樫原図
- 図8 富樫原図
- 図9 山下1985の図番号97、100、241、246を改変
- 図10 山下1985の図番号97、243、259と別添図14、16、25、27を
合成、改変
- 図11 山下1985の図番号97と富樫原図を合成
図番号101と246を合成
- 図12 山下1985の図番号101と245を合成、改変
104と248を合成、改変
- 図13 別添図14、16、25、27を合成、改変

Re-Examination of Palaeolithic Cultural Layer in Hirono-Kita Site

Takashi TOGASHI

Hirono-Kita site is a palaeolithic site located in Iwatabara plateau in Shizuoka prefecture. Cultural layers of "the knife-shaped stone tool culture period" in this site are divided into two layers called "cultural layer K2" and "cultural layer K3" according to the excavation report. As things stand, however, it is a common understanding that it is impossible to recognize cultural layers stratigraphically. Therefore I have investigated whether or not it would be possible to divide cultural layers into "cultural layer K2" and "cultural layer K3". The excavation report says that there are apparently two cultural layers, because there was an intermediate layer between "cultural layer K2" and "cultural layer K3", and heap stones were definitely divided into two levels. Through reconstructing the excavating situations, however, I clarified that most blocks and heap stones were found from various depths. These situations are usual in palaeolithic sites at Iwatabara plateau. In conclusion, dividing cultural layers into "cultural layer K2" and "cultural layer K3" should be taken back, and dividing cultural layers at Hirono-Kita site inevitably requires re-examination.